

30 視覚障害と他障害を併せもつ入院患者に対するロービジョンケア

第三機能回復訓練部 山田明子、三輪まり枝、石田みさ子、中西勉

【はじめに】外界からの情報の80%以上は視覚より獲得するとされており、視覚障害による日常生活に対する不自由さはたいへん大きいものと考えられる。

また、脳血管障害を有する患者の中には、四肢障害のほかに、視覚障害を伴うものも少なくない。本発表では、当院に当初、視覚以外の障害に対するリハビリテーション訓練を主目的として入院された患者で、眼科受診により、視覚障害を併せ持つことが判った患者に対して、ロービジョンケアを行った症例について報告する。

【対象・方法】対象は、平成19年に当院に入院した患者のうち、四肢障害や高次脳機能障害等のほかに視覚障害を伴った3症例である。

症例1は、急性散在性脳脊髄炎の患者で、リハビリ訓練や入浴後に視力低下を感じるという本人の訴えがあり、主治医からの依頼でロービジョンケアを実施した。視機能評価においては、訓練前後での視機能検査を実施することにより、視力低下の状況を把握した。また、眼科外来における検査だけではなく、病棟等の患者が実際に不自由さを感じる場に視能訓練士が赴いて検査を実施し、視力低下がみられた際の対処法をアドバイスした。

症例2は、脳梗塞で半側無視を伴う高次脳機能障害の患者で、アイトラッキング手法を用いて半側無視の状態を確認し、重度の視覚障害を生じていたことを明確にした。また、患者のより正確な状態把握のため、他訓練部門への情報提供を行った。

症例3は、髄膜腫手術後の視神経萎縮の患者で、病棟内での生活において、外部との連絡手段である携帯電話のメール画面が見えないことや文書の読み書きに困難を感じていたため、拡大読書器などの補助具の選定を行い、本人の社会復帰へのモチベーションを高める援助を行った。

【結果】四肢障害や高次脳機能障害に対するリハビリテーションを目的とした患者の中にも、視覚障害を有し、入院生活に不自由を感じ、訓練にも支障をきたしている場合があることがわかった。

そのような場合、適切な視機能の評価を行い、患者一人ひとりの状態やニーズに合ったロービジョンケアを行うことが、入院生活の不自由さを改善するとともに、他のリハビリテーション訓練に望む際の手助けとなることが分かった。

また、患者の中には、退院後の生活においても不自由を感じる場合があるため、退院後の生活を考慮にいたした補助具の選定や、退院後においても継続してケアを行う必要性があることが分かった。

【まとめ】視覚以外の障害に対するリハビリテーション訓練を主とする患者の中にも、視覚障害を併せもつ患者がおり、視覚障害のために不自由さを感じ入院生活を送っている場合がある。そのような場合には、早期に適切な視機能の評価と、患者のニーズに合わせたロービジョンケアを行うことが必要である。